

國學院大學學術情報リポジトリ

書評と紹介 幡鎌一弘 安田次郎
著『祭礼で読み解く歴史と社会：
春日若宮おん祭の900年』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 笹村, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002329

〈書評と紹介〉

幡鎌一弘 安田次郎 著

『祭礼で読み解く歴史と社会 春日若宮おん祭の900年』

山川出版社 A5版 186頁 2160円 2016年11月刊

笹村和子

本書の始めにあたり、著者は春日社の成立と共におん祭りの御祭神である春日若宮神の誕生について触れる。この本の内容を「国の重要無形民俗文化財に指定されている春日若宮おん祭の歴史を今日にいたるまでたどったもの」とする。その関心や目的は、

- 一、900年継続された祭りの歴史の通史を書く試みが今までなかったので、おん祭りの中世から現代にいたるまでの概要を示すこと
- 二、古い時代のみ注目されがちである奈良県（大和国）の中世以降の歴史に目を向けてもらうこと
- 三、文化だけでなく政治、経済的にも独自の力を持つ寺院、神社が歴史・社会の中ではたしてきた役割の大きさや重要性を浮き彫りにすること
- 四、おん祭りを通して、庶民など公文書には登場しない身分の人々をみる試みをする
- 五、従来の歴史では生産の歴史（農業・工業）には注目されてきたが生活・人生を活性化させる非日常的・爆発的な消費を、祭りを通してみてゆくこと
- 六、900年に渡って続いてきた祭りの変化経緯、非変化部分、その理由を考えること

以上6点である。

これらの事を考慮し時代の流れに沿っておん祭りの歴史を追い、全体を把握している。構成は以下のようになっている。

はじめに

第1章 おん祭の成立

コラム 絵巻から消された祐房

第2章 流鏑馬と武士

コラム うまい酒を確保する

第3章 田楽と僧侶

コラム 将軍の特別席—黒木御所・白木御所—

第4章 中世から近世へ

第5章 『春日大宮若宮御祭礼図』を読む

コラム 警固のたばこ屋

第6章 近代の祭り

コラム 大阪相撲

終章 現代のおん祭

コラム のっぺと俗謡

あとがき

第1章では、おん祭りの成立として祭りの開始者・主催者が誰なのかを資料や奉幣の順序を踏まえつつ実証してゆく。現在の謂れと当時の資料の違いを指摘し、祭りの開始者が氏長者ではなく興福寺側大衆（僧侶）である事を簡潔に説明。国司の無力化で興福寺が大和国を実質支配している状態から、国司支配の再現に対し興福寺大衆が権益を守ることを祈っておん祭りが始められたと述べ、当時の「日使」^{ひのつかい}の実態は興福寺からの祭使（下級近衛の楽人）で、開始者を興福寺大衆と考えればごく自然な事であるとする。

第2章・3章では、筆者がおん祭りで最も重要なものとする流鏑馬、田楽についてそれぞれ述べる。

流鏑馬はおん祭りが始まった当初より組み込まれ、国内外の武士を組織・編成する手段として利用されたと説明する。初期の13世紀前半迄は国内外から人員が

参加、それ以降は国外の興福寺領荘園の武士には流鏑馬米の負担が課せられる。南北・室町期には6党の武士団が形成され、興福寺の権限拡大に伴い武士団が段階・発展的に流鏑馬に動員される。その順番争いの多さから根本的な解決法として、13世紀後半にはおん祭りの流鏑馬は稚児流鏑馬に変化してゆく流れを記す。また流鏑馬勤仕を命じられた願主人を中心としたチームの編成、宴会、贈り物等を解説。流鏑馬神事勤仕はそれを口実にして、領内の在地支配を支えるという一面もある事を説明する。

田楽については、田楽の説明（起源は田舞、田楽法師は楽器を用いる群舞と曲芸を本芸とする等）を辞書から引用した上で、田楽の御霊会との関係の深さを指摘する。怨霊を抑え込み追い払うという目的での御霊会で、田楽は天・地上の怪しい災気を祓い神と人の幸運を保つ、見れば三障四魔を自然に消滅させるものとし、御祭神の若宮の荒々しい崇り爲す性質からおん祭りも御霊会としての意味合いを持ち、田楽が若宮奉納の中心芸能であるのは当然であると述べる。

田楽頭役（興福寺の学侶=僧侶が任命される）が用意し使用する田楽装束は豪華で多大の費用を要し、贅沢・華美を戒める過差禁制が興福寺自身から何度も出されたが守られなかった。当時の人々は田楽の軽業・演奏・豪華装束が悪魔・妖魔祓いに必要と根強く考えられていたのではないかと指摘する。また田楽頭役とうやくの役目としての事例をあげ、莫大な費用を手段を分けて（反銭・訪銭・有徳銭・典役・間別銭まべち）臨時賦課し、飢饉の中でも徴収したり、時には武力行使をして神役や神への贈り物を取り立てた。田楽装束を渡す装束賜たばかりの儀式も神事の一環として扱われた事実や、田楽能や宴会が行われ、その後宵宮、祭礼当日、宴会と続き、無事に田楽頭役の役目が終わるまでの田楽祭礼の流れを説明する。後に乱世になり荘園制が揺らいでおん祭りの経済基盤が危機的状況になって、変容を余儀なくされてゆくと述べる。

第4章では、中世から近世へのおん祭りの状況を説明する。

9月17日に行われていたおん祭りの祭礼日は戦国期、国人の成長と興福寺内の紛争が重なり遅れがちになり、足利将軍の南都下向の時には9月27日になった。

15世紀末迄は祭りを中止すると翌年干ばつに成った事例も見られ、神罰の觀念が未だ根強くあり負担側の国人と主催の寺側とで祭りが中止されないよう妥協を重ね、結果として日時が遅れがちになる状況を説明する。16世紀に入ると戦乱で他国衆が入り乱れ興福寺の組織も崩れ始める。

16世紀後半には9年に渡り祭りが中止する。これが原因で神罰が下った訳でもなく、復興した時には祭りに対する人々の見方も変わり、時期をずらせば開催可能な祭りを中止した事実も存在する事から「延期してでも祭りを勤めなくてはならない」という考えが無くなっていても不思議はなく、個々の人の感性としての心の問題としての信心と政治体制とが分けられて行くようになったと述べる。

頭役制も戦国期には興福寺が費用を肩代わりする寺門助成が行われ、流鏑馬の願主人も経済的負担は惣領がしてそれぞれ役割が形骸化し、寺門や権力者に祭礼運営が集権化する。集権化は神仏の威光があつての事で、祭礼をめぐる心性の変化と無関係ではないとする。

豊臣秀吉の弟の秀長が大和国の領主となり、おん祭りに秀吉を迎えるため自ら祭りを準備・助成をする。主催者の立場を誇示し、実質的なおん祭りの主催者の地位は武家政権にとって代わられた。戦国期を通じておん祭りは構造変化し、役の実質は寺門（五師）と奈良奉行によって行なわれる様になった。おん祭りの費用は信心とは関係なく奈良奉行所が石高制によって広く大和国内に割り当てられた。またおん祭りには朝廷よりも幕府の意向が強く反映された事実を述べ、將軍の死により祭りが延引された事例を挙げる。

祭りの起源に関して、慶長16年（1611年）に春日社家が記した『春日神社記』におん祭りは藤原忠通の御願であると記されたのが最初であるとする。時代を少しおいて名所記が流布する17世紀におん祭りの忠通創始説が本格的に宣伝され始め、寛保2年（1742年）に藤村惇叙^{じゅんじょ}が『春日大宮若宮御祭礼図』を完成させて藤原忠通創始説を書いた所、本の絶大な影響力で通説の地位を獲得し今日に到ったとする。その時代背景に幕府中枢・各地の神社で神道思想が興隆、寛文2年（1662年）の幕府の出雲大社神仏分離容認や寛文10年（1670年）伊勢の火事復興時の寺

院移転の具体事例を挙げ、春日社でも興福寺の支配を脱し自立する動きが見られ（寛文訴訟）、神前の神仏分離・下級神職の禰宜に対する興福寺の支配排除を試みた。論争には負けたが、確信犯的に興福寺大衆がおん祭りを始めた事実を隠し神社と直結する氏長者を持ち出して結論を誘導、干ばつ・疫病の社会的事実を織り交ぜて忠通創始説を延宝8年(1680年)『春日神社記』に説明した。当時興福寺でもこの忠通創始説を受け入れており、その理由として実質奉行所の祭りになって世俗化した祭りの意味・役割を政治的・仏教的に再び問い直す時期であった事、また火事復興により、朝廷の支援を受けたり幕府に働きかけて資金集めをする為におん祭りの創始と関白の結びつきを強調し、朝廷を動かして天下泰平の現世利益（＝忠通創始説）を説く方が当時遥かに意味のあった事とする。

忠通創始説は近世社会の中で生まれた言説であり、春日社・興福寺がおん祭りの持つ意味を積極的に位置付け直した、近世化の到達点だと述べる。

第5章では『春日若宮御祭礼図』を他の追隨を許さない、おん祭りの大変よくできた解説書だとしてその成立を述べ、対応する個々の祭礼絵図を示しながら近世における行事の概要を説明する。

祭り前段階での流鏑馬定、御旅所繩棟(起工式)、お旅所御殿作事、湯立、装束たばり賜、大湯屋蜂起。祭り当日の遷幸の儀、お旅所での様子、南大門の様子、交名きょうみょう(おん祭り奉仕芸能者の出席をとる儀式)、行列の巫女、細男、猿楽、馬長児ばちやうのちこ(天皇・貴族等から調達された馬と乗る一行)、競馬。松の下ようごうのまつ「影向松」の場所での祭礼の様子、猿楽の奉納、乗込馬いさごうま、将馬、人足奉仕の諸藩・幕領から出る野太刀・長槍、諸士行列。松の下の儀が終わって、お旅所での神事・芸能、同時に行われる馬場での流鏑馬、相撲、遷幸の儀。後日能、周りでの露店の様子等を説明する。

おん祭りは時代と共に内容に変質を余儀なくされていったが、奈良の人々にとって祭りそのものが経済・娯乐的に無くてはならないものになっていたからこそ、廃絶危機の明治維新を乗り切れたと筆者は言う。

第6章では、近代の祭りの様子について述べる。

明治維新により祭りを支えていた奈良奉行所と興福寺が姿を消し、それ以降春

日社がその運営を担うことになった。明治元年は神祇官より例年通りおん祭り執行を許された。役回りは僧侶から神官に姿を変えて執り行われた。

祭儀にも変化があり倭舞の増加、仏語を謡う田楽能の取りやめ等があり、明治4年（1871年）に社寺領上知・神職免職・廃藩置県で更に祭礼の構造を覆し、巫女不参加・相撲省略等、作法の変化や長年の儀式の廃止が生じた。

民費募集が開始し活発化、行事順序も変化し、渡り行列に倭舞・相撲が加わり、湯立の代わりに神楽奉納の大宿所祭が催行された。おん祭りのための信者組織の講社が結成、更に改正が図られ発足した。保存会・安寧会なども組織され一定資金を確保可能になった。

大阪鉄道が開通し、大阪の講社が設立。その後奈良市が出来ると神社と市の協議で行なわれ、おん祭りは奈良市祭となった。3部の祭務委員会が発足し、従来の祭務委員会は春日奉賛会として結成。外国も含めた観光客誘致の為の祭りの意向が意識され、古儀復興しつつ他祭を参考（京都の時代祭等）にして様々な工夫が成された。

昭和に入ってから古儀を調査、行列が再整備され現在に繋がる12番の行列が決定された。戦時下でも大幅に規模を縮小されながら祭儀そのものはかろうじて中止を免れたが、厳しい状況下で終戦を迎える様子を述べる。

終章は、戦後復興と文化財指定されたおん祭りの様子を記す。

GHQの神道指令による政教分離で、観光事業家の多大な寄付により戦後数年を凌いだ後、奉讃会・商工会議所・観光協会の協賛で祭りが行われた。行列の古儀と観光の部分を生離して話題性のある行事を集め、共存させた。民俗調査が難航し、国の重要無形文化財に指定されたのは昭和54年（1979年）だった。この時におん祭保存会が発足した。昭和60年（1985年）に大和芸能懇話会が設立、祭礼研究と古儀復興に力を入れ、段階分けされて少しずつ復興が続けられている様子が述べられている。

おん祭りを通して歴史全体を通史的に見ていくのは本書が初めての試みである。あとがきに「明治維新はどうなの、それから昭和ぐらいままでとリクエストに

こたえようと、新聞や行政文書、神社の近代文書を調べている間にずいぶんと時間がかかり」とあるように、根拠資料を選び出して1冊の本までに圧縮されたのは大変骨が折れたことと推察する。

また、「本書が今後の研究のたたき台になればと思う」とあり、紹介しきれなかった史料も沢山あることも伝えた上で、今後のおん祭りに関する祭礼研究の土台にもなりうることも示唆する。

寛文年間の伊勢・出雲等の神道思想勃興の歴史事実の流れに着眼して、春日社と興福寺の訴訟を説明し、近世の文献に生じた藤原忠通のおん祭り創始説と結び付けて、天下泰平を氏長者が祈る為の祭りとしてこの時代に改めて意味合いを付けなおしたとする筆者の説明は、説得力が有るように思われた。

祭りの神事芸能の部分で流鏝馬と田楽が最も重要であるとして、この2つに関して本書では章をそれぞれ割いて説明している。しかしながらその具体的理由がはっきりと記されてはならず、何故なのかが気になり残念であった。また全体の中で著者がフォーカスして説明したい部分により根拠資料は変化するので、本書が祭りの通史全体を網羅しているとはいえ相当な数の関連資料が他にあるのだろう。

時代の流れで祭りを見ていると、祭りの主催側(興福寺衆徒→戦国大名→幕府)の変化と同時に祭りの諸役が形骸化し、それを主催側が裏から支える形が浮かび上がって来て分かり易く興味深い。

戦後における祭礼行例の復興の様子も詳しく記されていて、熱心な民衆の努力の結果として浮かび上がってくる古儀復興の部分が理解できる。古代祭祀研究でおん祭りの様な歴史の長い祭りを研究する時には、後世復興の部分をきちんと選別・考慮をした上で研究してゆく必要があるので復興部分の認識は欠かせない。

研究の入門書として本書を熟読すれば、読者はおん祭りの基礎的な土台知識や歴史の流れを把握する為の良い機会を得る事が出来る、良書であると考える。